

2025年度 お茶の水女子大学大学院
人間文化創成科学研究科（博士前期課程）

人間発達科学 専攻 ・ 心理学 コース

一般入試、外国人留学生入試
専門試験（外国語を含む）

試 験 日 : 2024 年 9 月 8 日(日)

試 験 時 間 : 9 時 30 分 ～ 11 時 30 分

【注意事項】

1. 監督者の「始め」の合図があるまで問題冊子を開けないこと。
2. 問題1と問題2には、それぞれ別の答案用紙を用いること。
3. 答案用紙の左上の問題番号欄に問題番号を明記すること。
例:問題1
4. 問題1、問題2にはそれぞれ複数の問が含まれる。解答する問の順序は任意だが、問の番号・記号を明記してから解答を記載すること。 例: (1)問1
5. 答案用紙の表面に書き切れない場合、裏面も解答欄として用いてよい。

問題 1

(1) 次の英文について問 1 と問 2 に日本語で答えなさい。なお、右肩に数字を付した語句については、本文の後に注があります。

この部分に記載されている文章については、
著作権法上の問題から掲載することが
できませんので、ご了承ください。

この部分に記載されている文章については、
著作権法上の問題から掲載することが
できませんので、ご了承ください。

(出典：Theobald, M. et al. (2022). Test anxiety does not predict exam performance when knowledge is controlled for: Strong evidence against the interference hypothesis of test anxiety. *Psychological Science*, 33(12), 2073-2083. より一部改変)

問1 下線部 (a) のように言える理由を具体的に述べなさい。(25 点)

問2 下線部 (b) について具体的に説明しなさい。(25 点)

この部分に記載されている文章については、
著作権法上の問題から掲載することが
できませんので、ご了承ください。

(出典 : Maymon, C. N. et al. (2024). The presence of fear: How subjective fear, not physiological changes, shapes the experience of presence. *Journal of Experimental Psychology: General*, 153(6), 1500-1516.)

問題 2

(1) 次の英文について問 1 ～問 4 に日本語で答えなさい。なお、右肩に数字を付した語句については、本文の後に注があります。

この部分に記載されている文章については、
著作権法上の問題から掲載することが
できませんので、ご了承ください。

この部分に記載されている文章については、
著作権法上の問題から掲載することが
できませんので、ご了承願います。

(出典：Levine, L. E. et al. (2021). *Child development: An active learning approach, Fourth edition*. SAGE Publications. より一部改変)

- 問1 本文中で取り上げられている西アフリカにおける研究では、どのように自然実験の手法を利用しているか説明しなさい。(15 点)
- 問2 この研究の方法、結果、結論について説明しなさい。(15 点)
- 問3 この研究で、研究対象以外の変数について、具体的にどのような対処が行われているか説明しなさい。(15 点)
- 問4 自然実験にはどのような欠点があると述べられているか説明しなさい。(15 点)

(2) 次の英文の全文を日本語に訳しなさい。なお、直訳すると意味が通じにくい部分は、意訳してもかまいません。(40 点)

この部分に記載されている文章については、
著作権法上の問題から掲載することが
できませんので、ご了承ください。

(出典 : Lakens, D. (2013). Calculating and reporting effect sizes to facilitate cumulative science: A practical primer for *t*-tests and ANOVAs. *Frontiers in Psychology*, 4, 863.)

2025 年度 お茶の水女子大学大学院
人間文化創成科学研究科（博士前期課程）
人間発達科学専攻 ・ 応用社会学コース
（一般および外国人留学生入試）
専 門 試 験 （ 外 国 語 を 含 む ）

試 験 日 :2024 年 9 月 8 日(日)

試験時間: 9:30 ～ 12:00

【注意事項】

解答は, 問1, 問2, 問3それぞれ別々の答案用紙に記入すること。

2025 年度 大学院 人間文化創成科学研究科(博士前期課程) 人間発達科学専攻
応用社会学コース 9 月入試 専門試験(外国語を含む) 一般および外国人留学生入試

問1. 次の英文を読んで、(1)～(3)の問いに答えなさい。

この部分に記載されている文章については、
著作権法上の問題から掲載することが
できませんので、ご了承ください。

(出典: Andres, Lesley, 2022, *Theories of the Sociology of Higher-Education Access and Participation*,
James E. Côté and Sarah Pickard eds., *Routledge Handbook of the Sociology of Higher Education*,
2nd Edition, London: Routledge, pp. 149-159 の中の pp. 149-150 を抜粋して一部改変.)

- (1) 下線部①を日本語に訳しなさい。
- (2) functionalist perspective において、教育制度はどのような役割を果たすものと考えられるか。本文の記述に即して説明しなさい。
- (3) 本文で説明されている functionalist perspective について、その限界を社会学的に論じなさい。

問2. 次の A, B の 2 問のうち, いずれか 1 問を選択して解答しなさい。(最初に A, B のいずれを選択したかを明記しなさい。)

A. オリンピック(オリンピック・パラリンピック競技大会)について, メディア, 資本主義, ナショナリズムの観点から論じなさい。その際, 3 つの観点すべてについて触れること。

B. 近代化について, 前近代社会からの移行プロセスとして社会学的に論じなさい。

問3. 次の①～⑥の人名や概念のうち 4 つを選んで, それぞれ項目の番号を明記してから 3 行以上で説明しなさい。

- ① 表層的な(見せかけの, 疑似的な)相関(spurious correlation)
- ② 参与観察(participant observation)
- ③ 属性原理と業績原理(ascription / achievement)
- ④ アンソニー・ギデنز(Anthony Giddens)
- ⑤ 隠れたカリキュラム(hidden curriculum)
- ⑥ 集合的記憶(collective memory, La mémoire collective)

2025年度 お茶の水女子大学大学院
人間文化創成科学研究科 (博士前期課程)

人間発達科学 専攻 ・ 保育・児童学 コース

一般・社会人特別・推薦・外国人留学生 入試
(専 門 試 験)

試 験 日 : 2024 年 9 月 8日 (日)

試 験 時 間 : 9時 30分 ~ 12時 00分

【注意事項】

1. 監督者の「始め」の合図があるまで問題冊子を開けないこと。
2. 試験中、用のある場合は手を挙げて監督者を呼ぶこと。
3. 問題毎に答案用紙1枚を使用し、問題番号を明記すること。
ただし、問題内に指示がある場合は、それに従うこと。

問題 1

次の英文を日本語に訳しなさい。なお、人名は英文表記のままでも良い。

この部分に記載されている文章については、
著作権法上の問題から掲載することが
できませんので、ご了承ください。

出典： Sutterby, J. A. (2019) Play Spaces, Indoors and Out. In Smith, P. K. & Roopnarine, J. L. (Eds.) *The Cambridge Handbook of Play: Developmental and Disciplinary Perspectives*. Cambridge University Press.

問題2

次のページからの資料1（1 ページ目から 3 ページ目までの 3 枚）の文章を読み、以下の（1）（2）に答えなさい。

- （1） ヒトの「ない」ものをイメージする力はなぜ身につけられたのだろうか。このことを筆者はどのように説明しているか、600 字程度で要約しなさい。
- （2） 資料1の本文中に出てくる「認知的流動性」とは何か、本文に即して 200 字程度で説明しなさい。

出典：齋藤亜矢（2014）『ヒトはなぜ絵を描くのか—芸術認知科学への招待』岩波書店（一部改変）

資料 1 1 ページ目

今ここに「ない」ものをイメージして、補う——想像する力をヒトはなぜ身につけたのだろうか。

狩猟技術の発達が関連しているという説がある。行き当たりばつたりと獲物を狩るのではなく、獲物の行方を追跡したり、待ち伏せしたりするには、動物の足跡を読むような簡単な推論が必要だ。ネアンデルタール人などの人類も、そのような推論をおこなっていたと考えられているが、後期旧石器時代(約4万2千〜1万3千年前)のクロマニヨン人たちは、特定の動物に狙いをきだめた、より計画的な狩りをおこなうようになっていた。獲物の移動経路や行動習性を理解し、地面などに残されたわずかな手がかりから、見えない獲物の動きを読む。そのなかで「ない」ものをイメージする力が磨かれたという説である。

また後期旧石器時代の人びとは、石器製作の名手でもあった。複雑な工程によって、一つの石片からいくつかの機能別の石器をつくり出した。そうやって石器をつくるには、完成形のイメージを頭に保持しながら石を砕き、理想の形状に近づけていく必要がある。そこでイメージの力が磨かれたという説もある。描いた壁画とともに洞窟から発掘されたたくさんの石器は、まさに「用の美」といった趣で、均整のとれたなめらかなフォルムはまるで美術上の芸術品のようなものだ。

ただし、そうやって狩猟や石器製作のときに頭に抱くイメージと、岩の凹凸にバイソンの姿を見立てるイメージとでは、異なる点がある。それは、前者がその場所(モノ)の過去や未来のイメージであるのに対して、後者は、その場所(モノ)の過去や未来とはまったく関係のない、別のモノを見立てているという点だ。

イメージの想起には、言語などのシンボルを扱う機能が関連しているとも考えられている。岩の凹凸にバイソンの姿を想像するということは、その岩の凹凸の特徴から「バイソン」の形に似た特徴を抽出し、判断することだからだ。想像することは、「何か」として見ることであり、一次的な視覚情報を知っているモノにカテゴリー化し、頭の中でそのシンボルに置き換えることだ。

そもそも、わたしたちが普段モノを見るときにのしくみをみてみよう。あるモノ(刺激)を見たとき、網膜に届いた光の情報は、まず後頭葉にある第一次視覚野(V1)に到達する(図3-1)。このV1には刺激の傾きや色に反応する神経細胞があり、その情報は、おもに二つの経路によってより高次の処理がなされる。側頭葉下部へ至る腹側経路は、*what*経路ともよばれ、モノが何であるかの情報処理(物体弁別)に関わる。一方、頭頂葉へ至る背側経路は、*where*経路ともよばれ、動きや空間に関わる情報の処理がおこなわれる。物に視線を向けたり、物をつかんだりするときに活用される視覚情報だ。

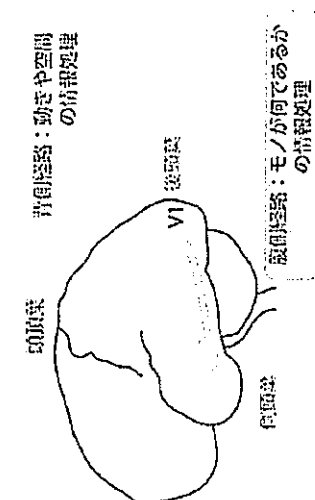


図3-1 脳の視覚認知における2つの経路



図3-2 文脈によって同じ顔の見え方が変わる。右端の顔は、上段の顔のなかにはおじさん、下段の顔のなかには動物の顔に見える。(Bugelski and Alampay, 1961)

「何か」を知ろうとする。たとえば、図3-3に何が描かれているか、そう簡単にはわからない。「何か」を知ろうとする過程で、頭のなかを検索している感じを実感していただけるのではないだろうか。

そうやって知識や記憶を総動員して、「何か」としてカテゴリー化する。だから壁のしみのようなあいまいな形にも、わたしたちはさまざまな「何か」を見る。月でウサギが餅つきをしているのも、おねしよのしみが日本地図をつくるのも、星の並びにさまざまな神話が生まれ出されたのも、この視覚認知の特性に基づいている(図3-4)。だからこそ、鉛筆1本が

モノが「何か」を認識することに関わる腹側経路では、V1のあとに通るV2とV4という二つの領域に、特定の曲率と向きをもった曲線、角度、同心円状のパターン、十字型、曲線の組み合わせなどに反応する細胞がある。さらにそのあとに向かう下側頭皮質(IT野)には、より複雑な図形に反応する細胞や、形、テクスチャ、色の組み合わせに反応する細胞がある。こうして低次の情報からより高次の情報に段階的に処理されるしくみだ。これらの情報から特徴を分析して、最終的に「何か」を決定することになる。

ただしヒトの場合、このような感覚入力からはじまるボトムアップ処理だけで「何か」を認識しているのではなく、前

頭葉からのトップダウン処理もおこなわれている。トップダウン処理では、そうやってパターン認知した情報が、知っているモノの形(知識表象)としてすでにあるかどうかを長期記憶のなかから検索して、最も似ている知識表象を選択する。つまりそれまでにもっていた知識や記憶と照らし合わせて、「何か」としてカテゴリー化する。

だから、モノが置かれた文脈によって、同じ形のモノでも別の「何か」として認識されることがある。図3-2の右端にある上下二つは同じ顔だ。しかし、上段のようにさまざまな顔の絵のなかにこの顔があると、メガネをかけたおじさんに見えやすく、下段のように動物の絵のなかにあると、ネズミに見えやすくなる。

とくに、入力される感覚からの情報が不十分なときには、このトップダウン処理が優位になる。そのときは、知識を使った推論によって、それが



図3-3 カモフラージュされたバターン、
山面中央部寄りにダグメシアアが見え
てくる(写真家 R. C. James による)



図3-4 奈良の長谷寺で見つけたチ
ンパンジー、ヒトはさまざまな形
にモノのイメージを見立てる。表
情を使ってコミュニケーションを
するヒトは、顔認知に特異性があ
り、とくに顔のイメージは生成し
やすい。

生み出す線でさまざまなものが表現できるのだらう。

「夕暮れのカラス」「絶望する人」「早春の竹林」——アイの水彩画を整理するとき、わたしが勝手につけていたタイトルだ。チンパンジーの本意ではないだろうが、しばらく見ていると、さまざまなイメージが浮かぶ。そしてタイトルをつけた方が、「何月何日に描いた赤と黄の絵」などというより、あの絵だな、と思いたしやすく便利だった。

このように、見たモノを頭のなかでカテゴリー化し、シンボルに置き換えておけば、情報として記憶から取

り出したり、他者に伝えたりすることが容易になる。そうして複雑な思考や効率的なコミュニケーションができるようになったことは、ヒトが文化や技術を発展させる原動力になったはずだ。

このカテゴリー化の基準になるのが、ほかでもない言語だ。だから異なる言語を話すヒトでは、その認識する世界も違はずだ、と主張するのが、サピアウィットフ仮説(言語相対性仮

説)である。言語化とカテゴリー化とがまったく同じとはいえないという反論もある。ただ少なくとも、ヒトが言語をもったことと、ヒトが世界をカテゴリー化して見る記号的なモノの見方をするようになったことは深く関連していそうだ。

イギリスの考古学者スティーヴン・ミズンは、壁画をはじめとする後期旧石器時代におこった文化の爆発の原動力を、知能が認知的流動性を得たことによるものだと指摘した。

ネアンデルタール人や初期のホモ・サピエンスの脳では、より原始的な一般知能に加えて、集団のなかでの社会生活に特化した社会的知能、狩猟採集に特化した博物学的知能、石器製作などの物づくりに特化した技術的知能の三つがそれぞれ独立に発達していた。その後、芸術や宗教を生み出すようになったホモ・サピエンスに備わったのは、新たな知能ではなく、三つの知能の間に認知的な流動性を得たことだ、という指摘だ。わたしたちは、概念や思考方法、知識を別のことに応用して使うことが得意だ。比喩や類推を好むことも、その証拠として考えると辻褄が合う。そしてこの認知的流動性を生み出したのが、言葉、それも今のわたしたちが使っているような分節化した構成的言語だと指摘されている。

問題3

倉橋惣三の保育思想について書かれた次のページからの資料2(1ページ目から3ページ目までの3枚)を読み、以下の(1)～(3)に答えなさい。

- (1) この文章の著者は、倉橋惣三の「誘導保育論」とはどのようなものだと捉えているか、250字程度で説明しなさい。
- (2) 傍線部(a)について、著者は倉橋惣三の保育思想と「理論」とはどのような関係にあると捉えているか、250字程度で説明しなさい。
- (3) 傍線部(b)について、著者は倉橋惣三の保育論の独自性と普遍性をそれぞれどのようなものと捉えているか、250字程度で説明しなさい。

出典：津守真(1977)「倉橋惣三の保育思想」日本保育学会編『保育学の進歩』フレーベル館(一部改変)

この部分に記載されている文章については、
著作権法上の問題から掲載することが
できませんので、ご了承ください。

この部分に記載されている文章については、
著作権法上の問題から掲載することが
できませんので、ご了承ください。

この部分に記載されている文章については、
著作権法上の問題から掲載することが
できませんので、ご了承願います。